

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520606

研究課題名（和文） 日記にみる武士と農民の日常生活に関する研究

研究課題名（英文） Daily life of warriors and farmers recorded on their diaries

研究代表者

溝口 常俊 (MIZOGUCHI TSUNETOSHI)

名古屋大学・大学院環境学研究科・教授

研究者番号：50144100

研究成果の概要：

本研究は、日記の解読を通して武士と農民の生活を明らかにすることを目的とした。元禄時代の「鸚鵡籠中記」の分析では、従来のみだらな奉行と悪妻というイメージを覆す夫婦愛、家族愛の日常生活を明らかにできた。また、同日記に記載された自然災害（地震、雷、火事、風水害）に注目すると、当時の人々がこれらの災害に非常に敏感で恐怖心を持っていたことが分かった。明治～昭和戦前期の岐阜県羽島市、山梨県南アルプス市および鹿児島県南種子島町の各農民日記からは、農業だけを営む農民は希で個々人が漁業、商業など多様な生業に就いている日常生活が明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,900,000	480,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学、人文地理学

キーワード：日記、武士、農民、生業、日常生活、家族

1. 研究開始当初の背景

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の近世以降に個人が残した貴重な日記を収集、データベース化し、全登場人物の行動様式、行動範囲を分析することによって、当該地域・時代の地理的・社会的背景を明らかにすることである。近年、社会科学の分野で「日記」の価値が見直され、

庶民の生活の復元をもとに、当該時代の社会構造の一端が明らかにされつつあるが、その成果は数の上で少なく、かつ研究内容も限定的である。本研究が「日記」に注目したのは、たかが個人の記録で客観性がないと過小評価されがちな日記に光をあて、その価値に市民権を与えることにある。

研究期間を3年間としたのは、一つに近世

以降の日記は無尽蔵に残されているにもかかわらず、ほとんど活字化されていないので、すこしでもこうした日記を発掘し、その所在と概要を紹介すべきであると考え、研究期間中その作業を続けるとともに、以下の、事例としてとりあげる4つの日記の整理・分析に多大な時間を要するからである。すべての日記を1年目から読み出していき、初年度は元禄時代に尾張藩士が記した「鸚鵡籠中記」、2年目には美濃輪中地帯の庄屋が幕末・明治に記した「青木久兵衛日記」と山梨の養蚕農家が明治後半から昭和前半にかけて綴った「源吉日記」、そして3年目に戦前から現在まで書き続けている種子島の半農半漁民の「大崎蘇市日記」を分析した。

3. 研究の方法

平成18～20年の3年間で①『鸚鵡籠中記』の全文、元禄4(1694)年から享保2(1712)年までの記載事項を年月日別にデータベース化した。②名古屋城下絵図を参考にして、日記の登場人物の行動を追った。③種子島の大崎蘇市家を訪問し、日記帳の撮影と聞き取り調査を行い、日記のデータベース化を行った。④岐阜県「青木久兵衛日記」の明治初期の日記のデータベース化を行った。⑤山梨県「中込源吉日記」の全文を、巨摩郡の中込家で撮影し、日記のデータベース化を行った。

4. 研究成果

武士の日記については、「尾張藩士朝日文左衛門の描く妻」(林董一編『近世名古屋 享元絵巻の世界』清文堂出版、2007年、189-211頁)で武士の女性の行動を明らかにしたのを契機に、その続編として元禄時代の自然災害(地震、雷、火事、風水害)に際して、武士・町民がいかなる行動をとったかという点について分析をおこない、その成果は『愛知県史 自然史編』(2010刊行予定)に掲載され

ることになった。農民の日記に関しては、①山梨県御勅使川扇状地畑作農村の養蚕農家の明治30年代における日記の翻刻をおこなった。調査中に家計簿に相当する「金銭日記」が見つかり両日記の比較検討を開始した。②岐阜県輪中地域の地主である青木久兵衛日記の幕末明治期の日記の整理を行い、新たに発見した宗門改帳との照合をとおして、家族の中での個人生活の行動研究への可能性を見出した。③鹿児島県南種子島町の大崎蘇市氏の昭和6年から今日に至るまでの日記については、昭和8年～12年までの5年分を翻刻し終え、昭和30年代の日記の翻刻を継続して進めているところである。昭和8年の日記には家族構成員全員の行動記録が記されており家族経営の実態が把握できた。この成果については、名古屋大学経済学部近代生活史研究会で報告した(2008)。

武士の日記の拙稿に対しては史学雑誌の学界展望で「従来の悪妻像の訂正を試みる」との評価をうけた。また農民の各地各時代の日記分析をとおして、農民が農業だけに従事していたのではなく、漁業、商業活動を含んだ実に多様な生業を営んでいたことが、共通して指摘でき、従来の農民像を覆すことが出来た。

この3年間の同テーマの調査研究活動中に、あらたに北海道礼文島でタコ採り漁民の日記(現在89歳、現役漁師)が発見された。また江戸時代後半の津山の町奉行書日記も入手でき、これらの分析も加味することによって、「日記にみる武士と農民の日常生活に関する研究」をよりいっそう発展させていきたいと考えている。

日記から描き出される名古屋城下町の都市空間と武士・庶民の行動空間、輪中農民、養蚕農家、あるいは種子島島民の生業の多様性と地域間交流の実態を描き出すことによ

って、従来の、武士あるいは農民の固定的イメージが払拭され、新たな生活史、地域史が提言できたと考える。

例えば、「鸚鵡籠中記」からは、元禄期の名古屋城下の武士・町人の行動、心性を、火事場見物、心中や欠落の場所分析から読み解く事ができる。また、自然災害の記事も多く、西日本全域に被害をもたらした宝永4年(1707)の大地震の被害記録は、21世紀前半という近い将来に必ず起こるといわれている東南海地震対策に何らかの示唆を与えるであろう。さらには、武士の家族の交友関係についても、本人と母、父、前妻、後妻、子どもたちが如何に連れ立って外出していたかを詳細に描き出すことができる。以上の諸視点は、同資料を使つての従来の諸研究(芥子川律治『尾張の元禄人間模様』中日新聞社、1969、神坂次郎『元禄御豊奉行の日記』中公新書、1974、小池富雄「鸚鵡籠中期の再検討―編纂書誌的性格と成立の経緯」徳川黎明会『金鯨叢書』9、1982など)に於いてほとんどふれられておらず、今回の本研究の意義はかなり高いものと考えられる。

第2の「青木久兵衛日記」分析で、明治維新という政治上の一大変革期に、ごくふつうの農民がいかなる日常生活を送っていたか、日常生活レベルでいかなるも激変が起こったのかどうか、こうした点を検証し明らかにできることは、学術的にも価値があろう。その一方で、輪中という地域的な特色の具体像、たとえば船を使つての往来の実態などが明らかにできた。また、この村には宗門改帳が残っており、日記と宗門改帳を関連付けて分析できることは、いかなる家の何歳の誰が何をしたかが明らかになり、家族を地域の上で位置付けて考察できる点で、今後研究を続けていきたい。江戸時代の歴史を、宗門改帳を用い、農民の生活、農民の行動を通して解

明した研究に速水融『江戸農民の暮らしと人生』麗澤大学出版会、2002があり、西条村の庄屋日記を分析した業績に成松佐恵子『庄屋日記にみる江戸の世相と暮らし』ミネルヴァ書房、2000がある。この両研究は青木家の村と同じ輪中地域の村を対象としたもので、輪中地域の一般像をより明確に復元していく上で参考になる。

第3の「源吉日記」は、明治中期に養蚕農家として自立しようと意を決した青年の20歳から77歳までの日記(一部欠)であり、養蚕近代国家日本の底辺をささえた農民のほぼ一生を追跡できる点で貴重である。日記の一部を整理しただけであるが、畑作村落の1農民が、表向きは養蚕農家としてとらえられてはいるが、農業においても麦作、イモ作り、綿作と多毛作に余念がないばかりか、その他の仕事として地主、商人、はたまた大工の世話役であつたりして1人何役も兼ねており、その日常行動も多岐にわたっていることが明らかになった(溝口常俊『近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会、2002)。明治時代末から第2次世界大戦時代前までの分析が今回の研究の主眼とするところであり、その分析を進めている。

最後の「大崎蘇市日記」の第1の特色は第2次大戦前の日常生活が克明に復元できることであり、特に昭和8年においては、家族構成員全員(両親、姉、弟)の行動記録が付記されており、個人をこえて家族の行動を明らかにできる。大崎氏自身は農業を主業としつつも、漁師となって魚を捕り、それを自ら販売し、竹箕作りで家計を補っている。そこからは山梨の源吉氏と同様マルチな生業を営む農民像が浮かびあがってくる。また、自由に北朝鮮を旅行した記録も克明に綴られており、その旅行記も国交が途絶えている現代人の目からみると新鮮である。この日記を使つての

研究はまだなされていなく、戦前から現在にいたるまでの昭和史を、ロケットの発射場設置のために移転を余儀なくされた人々の動向なども今後分析し、報告していきたい。

こうした微細が描かれている日記分析は、土地・農業に関する文書、統計書に偏って農村をみることの多かった従来の研究に対して、その担い手である農民とその家族、地域住民を総合的に、多角的に考察する上で重要で、今後もっと必要になると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

溝口常俊「尾張藩士朝日文左衛門の描く妻」
(林董一編『近世名古屋 享元絵巻の世界』
清文堂出版、2007年、189-211頁)

[学会発表] (計 1 件)

Mizoguchi, Tsunetoshi, Water
Environment of Nobi Area, Central Japan,
International Workshop on Water Culture,
Kagawa University, 2008.11.6

[図書] (計 1 件)

溝口常俊監修『古地図で見る名古屋』樹林舎、
2009.10、84頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

溝口 常俊 (MIZOGUCHI TSUNETOSHI)
名古屋大学・大学院環境学研究科・教授
研究者番号：50144100